

小農林の生産力拡充策について

九大農学部 大野俊一

小農林の生産力拡充策の二、三を察論したい。敗戦により吾國の従來の森林面積の過半がそのとにあつた林木蓄積と共に喪失されたので吾が林業生産力の著しく減退しているのは自明である。更に戦時中及び戦後多量の林木が過伐又は濫伐されたし、森林火災とか松喰虫の被害で多くの林分は空乏にされ又引揚者の爲の雨田用地して森林面積は縮小を余儀なくされた。特に建設省は吾國の不足戸数を353万戸と推定しているがこの建築を完了するには莫大の建築用材を要することになる。斯く変化せる至濟事情を顧慮すれば全森林財産の徹底的改善、殊に用材の増産は林業者の義務となる。

北海道を除く都府縣の林野面積は約1757万町歩でこの中私有は約910万町歩であるから國家至營は私有林の生産を考えねばならず今後の糸刺生産の大部分は之に求められねばならぬであらう。現在の私有林中特に小農林はこの増大せる要求に適応しない性格となつてゐる。不良至營は森林状態を悪化し生産力を減少し、延いては金収収入を減ずるから之が租税力の萎縮に作用するので結局國民全体が損害を蒙ることとなる。

遂に小農林の生産力が如何なる理由で國有林又は大私有林に劣るのかの問題が生ずる。即ち生産的労働の相違か、至營管理方法か又はその他の悪条件があるのか等の詳細は述べられないが具体的に影響するものは元より森林所有者の所有、立地及び至營関係であらう。小農林は主として農家に兼營され自家生活資料たる薪材、落葉、下草の採取、放牧等の副産物利用を目的として施業され、用材生産を目的としていないのが普通であるが、今後は林業技術の向上により用材生産となすべき使命を有する。多くの小農林は小面積、不良形状、分級状態等のため殆ど独立至營ができないので至營上に遺憾な点が多い。夫故に交換分合による林地整理は必要であらうし、相隣者の間に委託至營の協議の心遣ひをせらるべきであらう。

収穫力の少い其他の原因の一つとして欠点ある造林が挙げられよう。多くの場合立地及び至營関係の範囲内で造林力を示す樹種が少なくとも若干はあろうから適地適木主義は実施されるべきである。

次に至營的効果に着しく作用するのは作業指導の良否である。私有林に於ては従來この指導者に欠けていた多くの所有者も指導者の技術的能力が多大の効果を齎らすものと考えていた。森林至營は特別な知識と洞察力を必要とする。森林所有者が之等の知力を有することは稀である。この点に於て國家は私有林を充分に監督し個々の林業に干渉するの要あり、木材需要が増大すればする程益々各種の立法的措置を講ぜねばならぬであらう。

自然に適える造林、適切な保護措置、収益の測定、時と所による有利な売却、将来への見通等は専門的自然科学的教育を主たる知識人のみが正しく為し得る。今次の回家試験による林業技術普及員の任用により小農林のみならず一般私有林が最高の生産力を發揮することになれば、国家経済に寄与するばかりでなく、所有者の財政的利益ともなる。

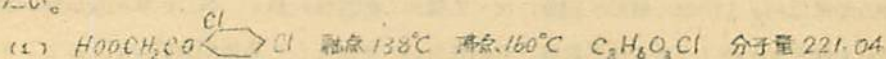
更に最近公布されよう臨時造林措置法により私有の未立木地の造林が遂行されるならば国土保安に役立つのみならずその生産力を高める結果となる。要するに小農林の生産力充實には所有者の自覚は勿論国家の援助と法律的強制は欠き得ないものと感ずる。

2.4-Dに対する林木稚苗の耐害性並に除草効果に関する研究

日本興産公社熊本地方局 林南 谷 純 司

1. 緒 言

最近になって漸く実用化されつつある新除草剤 2,4-D (2,4-Dichlorophenoxy acetic acid)⁽¹⁾ を林木稚苗に施用することによって除草性は如何に軽減され苗木と雑草との反応はどんなに変わるか、その実用性について昭和 23 年 4 月より 8 月まで及び昨年夏に若干実施した試験の結果を簡単に報告したい。



2. 実験方法

施用法にはタルフを混入した粉剤をそのまま、撒布する方法と水溶液を噴霧する方法がある。本実験では 2,4-D を炭酸ソーダのアルカリ溶液として後者の方法を用いた。この場合苗木は発芽後 40 乃至 50 日を経過したものを用い、2,4-D の濃度を 10% (10 倍液区)、2% (50 倍液区)、1% (100 倍液区)、0.33% (300 倍液区)、0.2% (500 倍液区) の 5 区に分けそれぞれ 22 種の雑苗について行い、雑草については、2,4-D の濃度を 1% (100 倍液区)、0.33% (300 倍液区)、0.2% (500 倍液区)、0.1% (1000 倍液区)、0.05% (2000 倍液区) の 5 区にしてそれぞれ 40 種の雑草について行つた。噴霧は雑苗、雑草の各個体の上部及下部より一面に行い 1 日おきに反応を調査した。

この他スギ、ヒノキの発芽後 40 日前後の稚苗に対して坪当り 0.1 瓦より 1 瓦まで 10 区の施用区を 2ヶ所に掛け濃度を 0.1% (1000 倍) 及び 0.2% (500 倍) として一面に噴霧し同様に観察した。

3. 結 果